

近代朝鮮における洋楽普及と愛国唱歌教育運動

—キリスト教主義学校を中心に—

朴 成 泰

The Prevalence of Western Music and the Movement for
Teaching Korean Patriotic Songs in Modern Korea
— specifically in Mission Schools —

sungtai PARK

(Received September 26, 2003)

はじめに

北東アジアの一角に位置した朝鮮は小国でありながらも、518年(1392～1910年)を存命し、世界史における一王朝として最も長い歴史をもつ国と言われる。朝鮮は新羅時代から隆盛した仏教を排除し、朱子学儒教を信奉した。この朱子学は宗教や学問だけではなく、朝鮮王朝の統治理念として取り入れ、大きな問題を抱えながらも、独特な政治、制度、経済、文化、教育などを創り出した。

このような儒教国家に新たな変革をもたらしたのは、開国以来、アメリカ宣教師によるキリスト教の布教活動が朝鮮の政治、文化、教育などに新しい時代を予告していた。アメリカ宣教師の究極的目標は布教事業を最重視しながら、近代文明の恵みとも言える医療事業や教育事業を組織的、体系的、系統的に展開した結果、朝鮮民族は従来の中華文明だけではなく、新たな西洋文明の存在を認識することになる。

西洋の学校教育は、キリスト教を中心に発展した音楽が学校教育の重要な教育内容として位置づけられたが、これは、朝鮮の学校教育においては存在しない新しい芸術教育であった。このような洋楽が近代教育を象徴する学校から、唱歌教育を通して普及されることは、朝鮮教育だけではなく、社会の発展にも結び付くものであった。

朝鮮の支配権を争う日清戦争、日露戦争を契機に洋楽としても愛唱された唱歌は、近代教育を主導する私立学校から高揚した。ことにキリスト教主義学校を中心に民族精神、抗日思想などの歌詞づけ賛美歌の替歌が広く歌われた。しかし、愛国唱歌教育運動の先行研究では、愛国唱歌に関わる政治的、挑戦的、悲観的な歌詞が散見される反面、音楽そのものの実態がどのように発展されたかは解明されていない。

したがって、本稿では、愛国唱歌教育運動を新しい視点から、歴史的、民族的な思想を追究しながら、洋楽がどのように導入されたかを考察すると共に、論述の展開は、愛国唱歌教育運動、とくに音楽教育の水準が高かったと言われるキリスト教主義学校を中心に洋楽普及の実態を分析する。

1. 朝鮮の開化と日本の対韓教育政策

朝鮮は建国以来、政治、外交、経済、教育などあらゆる分野を中国から取り入れ、中華思想や中華文明が重視された国政を堅持した。朝鮮26代国王高宗（1863～1907年）の父親である大院君の摂政による鎖国政策は、当時の朝鮮を縦断旅行した英国女流作家のイザベラ・バード（Isabella L. Bird）が「隠者の国」と表現したように、¹⁾ 朝鮮は中国以外には一切に目を配らない閉鎖政治を貫徹していた。その結果、朝鮮は日本をはじめ、北東アジアに押し寄せられる近代文明の受容機会を見失い、衰退の道程を加速化させた。

日本は1868年、明治天皇の王制復古宣言が行われ、翌年に江戸幕府の倒壊を経て、明治政府成立に至る。日本が国際社会に存在を現わす契機は、清国の北清事変、いわゆる義和団事件（1899年）の鎮圧を目的に編成した8カ国からなる連合軍の主力となって戦い、欧米列強の一角として認められたことである。その成果は、フィリピン領有を固めた米国と共に、日本がアジアにおける支配権の可能性を顕示するものである。日本は軍事的、経済的に優越した欧米に対抗する民族結集の場は、万世一系の皇統に結び付く皇国であるという物語を共有することで実現する。こうして明治政府は天皇が国家の根軸であり、権力の主体であることを説き、万邦に対峙しうる独立国日本の基盤を固めていく。

朝鮮における明治政府と最初の接近は江華島事件からみることができるが、この事件は朝鮮の日本植民地化への出発点とも言える。曲がりなりにも開国を果たし、国際関係にも目覚めた日本にとって鎖国政治を続ける朝鮮は、まさに今後の課題として注目すべき隣国であった。測量や近海水路の調査に名を借りて日本軍艦の姿は絶えず朝鮮沿岸に出没する。軍艦「雲揚」は1875年5月25日に予告なしに釜山に入港し、発砲練習という示威行動に続いて同9月19日に京畿道、江華島沖に現われ、飲料水の補給を要求した。しかし、不法侵入と見なした朝鮮軍は砲火で応える。「雲揚」は島の砲台を撃破すると共に、永宗島に上陸して民家を焼き払い38門の砲を押収した。帰投した日本は、この事件をきっかけとして、日朝修好条規（江華島条約、1876年9月2月）を締結させ、朝鮮支配への道を開く。²⁾

日清戦争（1894年8月1日）は、宣戦から翌年4月の下関講和条約まで、全くの一方的による近代日本初の対外戦争である。日本は鎖国政策から脱皮して近代的な富国強兵政策を推進して来た。そこで日清両国は明治初期から朝鮮の支配権をめぐる角逐抗争を重ねて火花を散らし合った。1894年甲午農民戦争をきっかけとして、西側の牙山から入った清軍、西側黄海の仁川から投入された日本軍は開戦した。全くの第三国を戦場とした両国であるが、陸戦に平壤、海戦に黄海の決戦をいずれも日本が大勝した。清国を朝鮮から駆逐した日本は、当然のこのように、新しい支配者の座を追求し始める。³⁾ 一方、日本国内では、朝鮮統治論が百家争鳴を彷彿するが、注目される論客は政治団体である東邦協会の川崎三郎である。彼は総合雑誌『太陽』を通して、朝鮮統治論を朝鮮独立論、朝鮮中立論、朝鮮併呑論、朝鮮分割論、朝鮮保護論を取り上げ、『朝鮮保護論』是れ極めて平允妥当の説せ、夫れ朝鮮を扶掖して其内政を革新し、以て東邦の平和を永遠に保護するは、日本の天職ならずや、故に、朝鮮を以て、我保護国と為すは、東邦の平和を保護する所以也⁴⁾ と論じた。日露戦争後、日本は実際に朝鮮を保護国として転落させたことをみると、川崎の先見は一定の影響を与えたと言えよう。

戦勝国日本は、単なる軍事的勝利だけでなく、最後まで中国の属国として残され、中華文明に陶醉していた朝鮮に日本から注入する近代文明の通路ができあがったことを意味する。確かに、日本は漢字文化圏に位置しながらも、開国以来、政治、軍事、経済、文化、教育などに一

定の欧米化が進むと同時に、日本の固有文化や思想にも近代という波が影響を与えていた。教育においても、すでに寺子屋時代を終え、学校教育が普及され、子どもたちは漢字文化を含めながら、近代文明を中心とする公教育が行われ、学校そのものが新しい時代を迎えていた。

日清戦争直後、日本では朝鮮の学校教育に関心を見せ始め、同年に東邦協会が設立され、7月28日、朝鮮教育に対する意見が交わされる。東邦協会は朝鮮教育の調査を一任するが、当時の協議内容を取り上げると、柔道家、教育家の嘉納治五郎は「教科書などを編製して彼の国に送るも方便の一なるへけれと先づ人を派して彼れの国情を詳にし而して後教育上の改革策に及ぶは順序ならむ」と説く。日下部三之介は「朝鮮国の教育制度は補修すべきか將た建設すべきか」と論じながら、言語、道徳、教育を言及する。そして「伊沢修二氏は云ふ人を派して彼れの国情を探る固より一方便ならむ然れとも目下の場合は能く彼の国の事情に通したる岡倉君に托して一の方案を製し之を原案として議するの優れるに如かさるへし」⁵⁾と薦め、岡倉由三郎(1868~1936年)の在朝経験を促している。

東邦協会は朝鮮教育を熟知する岡倉に一任させたが、岡倉は日清戦争以前の1891年より、朝鮮政府設立の官立日語学校の教師として招聘される。彼は東京帝国大学を卒業し、東京高等師範学校および立教大学校教授の経歴をもち、英語の基礎教授に尽力し、『新英和大辞典』を著述した英語学者である。姉の岡倉天心(1862~1913年)は明治時代の美術界の権威者であり、東京美術学校長の歴任、日本美術院の創設、米国ボストン美術館東洋部長に任命されている。岡倉は英語学者としてハングルに強い関心を見せ、1891年に初代日本語教師として自ら渡朝し、2年間の勤務を終えて帰国後は英語とハングルの研究に携わる。⁶⁾

その後、彼は雑誌『教育時論』を通して日語学校の教育経験を生かし、朝鮮教育政策論を述べているが、朝鮮教育に関する的確な報告内容と実践分析は傾聴すべきものである。⁷⁾すなわち、朝鮮の教育が四書五経を中心とする儒教教育を厳しく批判すると同時に、新しい教育のあり方を詳しく論じている。まず日本の教育制度をそのまま取り入れ、学部(文部省に準ずる)学務局に専門分野と普通分野を設ける。学校制度においては、日本のこども大学、高等学校、中学校、小学校を設置することは時機尚早であり、朝鮮における学校教育の当面課題は小学校教員養成であるが、教員養成に携われる教官の確保が先決課題である。そして専門教育の修学を志願する生徒の確保が急務であるとみている。

これら教育事業を成し遂げるために、とりあえず簡易中学校の設立が必要である。修学年限は2年制として定め、入学生は児童でなく、20歳程度の青年が望ましい。入試問題は朝鮮人が最も好む漢文だけを課する。学科課程は漢文、修身、万邦歴史、地理、地文、理科、数学、外国語などであるが、その程度は必要に応じて教える。

教科内容も概ね触れており、修身は主に立志篇的な伝記や談話などを取り扱うが、朝鮮人は理論を忌むから避けることが望ましい。道徳においても、教育内容はやはり孔子や孟子の教えを伝えなければならない。例えば、四書五経から取るべきである。その理由は、中国古典を課さなければ、登校する生徒は皆無となる。

万邦歴史地理は概要のみで充分であるが、いうまでもなく朝鮮、日本、支那(中国)の地理や歴史をも含むべきである。地文、理科はなぜ雨が降るか、なぜ井戸を掘れば水が出るか、程度の簡単な内容で足りる。数学は幾何、代数などは要らず、算術も比例くらいが適切である。外国語は覚え易いこと、目下の朝鮮人に必要な知識を含むことの二点を挙げると、日本語を勧めたい。

岡倉は「日本人にして、日本語を主張す、引水我田論なりと云ふもあらんかなれども、然れ

ども支那語は朝鮮人に取りては、日本語より覚へ易からんも、朝鮮に必要な知識を包含する点に於て、或は日本語に勝らんも、然れども朝鮮人に取りて、覚へ易からず。此二長を備ふるものは、日本語なり」⁸⁾ という。

簡易中学校から卒業生が出ると、一部は直ちに公務員として配置し、一部は書堂（寺子屋）の教員となる。後に書堂はその組織を小学校として改編し、教科は修身、漢文、国語、算術、万国地理、歴史などを課する。教科内容を示すと、修身は伝統的な儒教を中心とする孝経に基づくと共に、簡単な倫理的談話を課する。算術は四則、万邦地理歴史は談話で十分である。男児の就学年齢は6～7歳より認め、凡そ8歳まで修学期間を定める。女兒の就学は5歳くらいなら男児と同じ教育を認めるべきである。この年齢を過ぎると、「男女七歳不同席」の儒教倫理に反する。儒教倫理に抵触しない方法は、男女区別以前の年齢に入学させ、せめて漢字の基礎だけでも手解きくらいを授けてもよい、⁹⁾ という岡倉の新しい就学年齢の発想が見受けられる。

簡易中学校の卒業生の中に残された一部は、実用専門の学問を修めるべきである。彼らのために日本の帝国大学のように、6単科大学を設け、学問を教える必要はない。朝鮮は学問を追究するより、術（技術）を勤めるべきである。例えば、医科の場合、種痘、衛生の述を授け、日本において薬局の仕事と見なしているものを与えるべきである。工科の場合、橋を造ったり、鉄道を敷設したり、単純な術だけを授けて速成を目指すべきである。いわゆる実用専門学校のようなものを構想しなければならない。もしこの学校の卒業生の中で俊秀な者が現われると、外国に派遣して学問を学ばせても決して遅くない。

教育事業とは、その根底より改革しようとするれば、その効果をあげるには、5年あるいは10年後を待たなければならない。今日の朝鮮の教育改革は、5～10年後を待たず、即時の治療が必要であり、理論通りの政策だけでは何も上手く行かない。¹⁰⁾

岡倉が朝鮮で自ら教育活動を通して認識した朝鮮教育と学校制度のあり方を論じると、朝鮮教育に強い関心を見せていた日本国内の著名な教育関係者も、独自の朝鮮教育論を提唱した。

当時、朝鮮に対する教育論は教育者の個人活動が中心であるが、日清戦争以降は新たな変化として教育団体も現われる。その動向から「朝鮮国教育研究団体」が設立され、「遂に成る、委員は辻、伊澤、西村、野尻、日下部の諸氏なりと言ふ」¹¹⁾ 人物らが中心に活動を始める。この団体は後に、「朝鮮国教育研究会」へと改名されるが、その規約で注目される内容は「第一条 本会の目的は博く朝鮮国の教育に関する事項を取調べ其制度方法を研究し以て該国教育の進歩を助くるに在り」「第五条 本会の事務所は大日本教育会内に設く」と定められ、常任委員は辻新次、伊澤修二、高嶋信茂、日下部三之介、山田輝民、そして常務委員長に辻新次が任じられる。¹²⁾

このように、朝鮮教育に対する組織が結成されると、政府や団体だけに止まらず、在野の論客からも意見が述べられる。宮澤郡治は朝鮮教育改良案の要点を提出した。それは「(1)朝鮮教育には、日本国語を用ふべし。(2)朝鮮中学の程度は、日本尋常中学に、朝鮮大学の程度は、日本高等中学の程度に準ずべし。(3)朝鮮中学は、師範学校と同処に設くべし。(4)初等学校の教員給料は、国庫より支弁すべし。(5)道徳は、東洋西洋の倫理を酌量して授くべし。(6)初等学校の読書は、初に日本の片仮名平仮名を教へ、次に漢字交じり文を教ふべし。決して漢文を教ふべからず」¹³⁾ と提案した。

宮澤の朝鮮教育政策は、項目だけ示されて詳しい内容は分析できないが、その趣旨は読み取ることができる。

(1)朝鮮の学校教育における日本語の使用は、韓国併合後ならやむを得ないが、日清戦争の直後に日本語使用の主張は反日感情を高めるだけである。

(2)朝鮮中学校は尋常中学校、朝鮮大学は高等中学校を設置すると構想する。しかし、韓国併合後の教育制度は中等教育に準ずる実業学校を認めたことがあるが、官公立学校をみる限り中学校が設置されたことはない。大学は日本の高等中学校の水準を示すが、実際は京城帝国大学(1926~1945年)が設立され、日本人および朝鮮人が在籍する。しかし、朝鮮人は初等教育機関の普通学校(4年制)、あるいは中等教育機関の実業学校(農業、商業)の卒業生が受験するが、日本人は中学校、高等学校卒業生が受験するため、日本人学生が大多数を占めた。

(3)朝鮮中学校は、師範学校も併設すると示す。しかし、日本人の場合、教育制度および学校系統における中学校と師範学校は中等教育機関であり、実際に中学校は師範学校より上位に位置づけられ、教員養成機能を表明したことはない。朝鮮人の場合、後に京城師範学校が設立されるが、朝鮮人の教員養成は、主に臨時教員養成所などより行われ、教員資質は高いとは言えない。

(4)小学校教員の給料は、国庫より支給するよう求める。朝鮮政府による学校教育は近代的教育を目指し、当面の教育目標は文明開化を目指す。しかし、民衆は500年の歴史をもつ朝鮮社会に朱子学儒教による儒学は書堂教育(寺子屋)から始まるが、学校教育は伝統社会の破壊者、侵略者として見なされ、日本人や欧米人宣教師には敵意を抱くことになった。その反面、従来の儒教思想に基づく書堂教育には、相変わらず好感をみせる。こうした経緯から、日本の施策する近代学校の代名詞である「尋常小学校」は児童、生徒募集はいうまでもなく、運営資金も集められない。日本は「尋常小学校」を移入するために、教員給料などは朝鮮政府に財政を求めていた。

(5)道徳は、東西倫理を考慮して教えると示す。朝鮮における道徳とは、朱子学儒教を意味する。朝鮮における政治や宗教は儒教に傾倒するが、朝鮮にとって儒教は500年の歴史をもつ民族思想の根幹を築いている。しかし、儒教だけでは、従来の封建社会の踏襲に過ぎない。日清戦争という時代の変革を迎え、欧米文化も取り入れる国家近代化を呼び掛けていた。

(6)小学校の読書は、まず日本の片仮名と平仮名を教えた後、次に漢字交じり文を教える。決して漢文を教えるてはいけないという。学校教育の使用言語の採択に関わる問題は、単なる学校教育の言語選択でなく、民族思想に関わる問題である。朝鮮における言語は中華文明に陶醉した経緯から、上流社会の両班階層では敢えて漢字と中国古典を好んだが、民衆社会の中人、常民などは、技術、農業、商業などに携わりながら、ハングルを使用した。したがって、宮澤の主張する初等教育の日本語使用は日清戦争の道程をみると最も敬遠したい言語であり、漢文を課しないと中人、常民が関心を見せず、両班階層も学校教育への批判と共に、書堂教育への回帰を渴望した。

朝鮮の開化はかなり遅れたが、中国を通して確かに萌芽期を迎えていた。日清戦争の結果、日本の近代文明が威力を示し、その内容も大きく変質した。とりわけ学校教育は人材確保という当面事情も視野に入れ、日本学校制度の縮小版を提示している。教育内容においては、尋常中学校の水準を事実上の上限と見受けられており、教育内容の性格においても思想や理論はできる限り避けて「技」、すなわち技術のみを重視し、植民地教育に求められる実業教育の一環として位置づけることができる。しかし、当時、近代教育に先行しているキリスト主義学校は、宗教教育をはじめ、欧米の近代知識、科学技術、そして高度の芸術教育を行い、朝鮮近代教育の先駆者として自負するほど発展を成し遂げている。戦勝国日本の遅れた対朝学校教育が朝鮮

と欧米の生徒や宣教師に紛れもない異質を感じさせたことはいうまでもない。

2. キリスト教受容における洋楽普及過程

朝鮮におけるキリスト教は、確かな証拠はないが、6世紀の統一新羅時代から接したと見られる。当時のキリスト教は景教(Nestorians)という特殊な教会である。実際に、朝鮮に外国人宣教師が入国したことは、文禄の役の際、小西行長の軍団を従軍したセスペデス(Ge Cespedes)である。彼は日朝関係が最悪であるため、布教事業は自粛したと思われる。その後、中国の北京を往来する朝鮮使臣「冬至使」一行に李承薫という学者が1784年に「ベドロ」という名の洗礼を受けたが、朝鮮において公式のキリスト教受容を示すものである。しかし、キリスト教は朝鮮政府から大逆謀反の迫害を受けたが、この受難には朋党要素が加えられている。辛亥教乱(1801年)、己亥教乱(1839年)、丙寅教乱(1866年)などは大掛かりの迫害を受け、大きな被害を受けた。

韓国キリスト教史における朝鮮教区の定めは重要な意味をもつ。本来、中国北京教区の支部として位置づけられた朝鮮教会をグレゴリ16世が独立教区として設定したことは、特記すべきものである。これは政治的、文化的に朝鮮が清国から独立したという事実を宗教として確定する意味である。

カトリック教会は近代朝鮮の学術、文学の発展に画期的な貢献をした。丁茶山一派の実学、許均などの文芸、フランス神父らを中心に朝仏の比較文学および辞典の集成、ダレ(Dallet)神父の『朝鮮教会史』はいうまでもなく、丁夏祥の『上帝相書』のような力作は朝鮮カトリック教会の高い実力をみせるものである。しかし、黄嗣永のような信徒が帛書の密書を送り、キリスト教兵隊と軍艦の出兵を要請した。事件は朝鮮のキリスト教化を計ったと見なされ、カトリック教会は過酷な迫害を受けざるを得なかった。

プロテスタント宣教師として最初に入国した者は米国人のアレン(H.N.Allen, 1858~1932年)である。彼は甲申政変(1884年)の際、医師として閔泳翊のけがを治療した結果、王室の厚い信頼を得て病院の広恵院を設立したが、これをきっかけに布教事業が黙認される。翌年4月、初めて公に宣教師として米国人アペンゼラー(A.G.Appenzeller)、アンダーウッド(H.G.Anderwood)が1885年4月に済物浦(仁川)に上陸した。朝鮮に受容されたキリスト教は米国の一部教派的なキリスト教の形態であり、西欧の教会に見受ける統一が欠けた教派、あるいは主観的な信仰を基礎にしている。韓国の教会神学の弱体理由はこの点である。

外国人宣教師らは自治、自立、宣教を原則とするネビウス方式¹⁴⁾を取り、いわゆる「COMITY PLAN」を導入し、宣教地域と宣教内容の重複を避けた。これは近代的な市民意識の育成を中心とした倫理的な価値観が内在した結果、教会論、宣教論、あるいは民族意識の開発、責任を負う近代市民の養成に貢献し、遂に朝鮮においてキリスト教が愛国的な同盟体として登場した。

日本の朝鮮占有が始まると、悲憤に満ちた民衆は精神的慰安と文明国欧米を背景とするキリスト教に帰依する信徒が急増した。日露戦争の結果、第二次日韓協約(乙巳保護条約, 1905年)が締結されると、日本は朝鮮人の抗日運動を抑えるために、教会を潰すしかないと断言するほどであった。実際、教会は憤慨、悲哀に満ちた民衆の精神的な安息の役割を果たしたが、全国的規模の愛国思想を高揚する組織は教会が重要な役割を担っていたと言える。

キリスト教は、平壤を中心に展開したリバイバル伝道集会(復興会, 1907年)をきっかけに布教事業の基盤を整える。それは結ばれた信仰と固められた民族意識が根幹を成し遂げている。当時、韓国キリスト教は教派の連合を神学的、教會的、事業的に組織する計画を構想する

と同時に、「韓国キリスト教会」という独立教会の出現も計画した。しかし、宣教師を欧米に派遣した一部教会は、過剰慎重によって計画を挫折してしまう。

朝鮮における洋楽受容はキリスト教受容と同時に展開されたが、とりわけいち早く入国した米国宣教師の布教事業と教育事業が影響を与えたと言える。彼らは近代教育の普及に尽力し、1886年にアッペンゼラーの培材学堂、スクラントン夫人の梨花学堂、アンダーウッドの徹新学校、そして1887年にエリス (A.J.Allers) が貞信女学校を設立した。

これらの学校は当時、儒教思想を基に広く普及された書堂 (寺子屋) に比べると、全く性格の異なる近代教育、キリスト教精神を普及したが、何よりも差別待遇を受けた女子教育に着目していた。音楽史学者の李宥善氏によれば、「女子は『女必従夫』という儒教因習に従うため、就学が認められず、女子教育は家庭教育としてハンゲルを習うが、一部の上流家庭では千字文を学ばせ、儒教精神と道徳教育に徹底した。漢文は「真書」と呼ばれ、男子のみに許せられた」¹⁵⁾ という。

韓国においては自然発生的な民謡の以外に、新しい詩を歌う歌詞や詩歌、雑歌類と唱劇に関連する唱のような声楽曲も存在していた。李宥善氏によると、「韓国音楽は郷歌や雑歌類を除けば、貴族階層が独占し、厳格な形式を整えた詩歌や歌曲は、決して民衆から歌われなかった。厳しい儒教社会に基づく詩文学形式の歌曲が作られた。一方、外国の新しい思潮に影響を受け、その様式が変化されたことは、歴史の流れから当然な帰結である。激動する19世紀後半の内外情勢とキリスト教の影響を受け、従来の詠嘆調の旋律から新しい思潮に反応した歌曲形式が発生したが、これが唱歌である」¹⁶⁾ と論じている。

一方、音楽学者の魯東銀氏は、前述したキリスト教主義学校が学科課程にほとんど聖書と賛美歌が課されたと論じながら、「これら学校が学校史を刊行しながら、黎明期の学科課程に唱歌を課したというが、当時、唱歌という用語は一般化されなかったという視点から再検討が求められる。この名称は1900年頃に散在していたが、1906年、学部勅令第44号『普通学校令』『普通学校令施行規則』を公布し、学科目として唱歌を課するまでは一般化されなかったため、新しい名称が求められた。黎明期から唱歌の用語を用いたという事実は、唱歌の本質を解明することに欠かせない要素である。とりわけ韓国洋楽史の成立過程において唱歌は画期的転換であり、この分野の研究者らが韓国改新教に傾き、歴史的事実が少なくない部分に誤りを露呈している」¹⁷⁾ と指摘している。

更に、魯東銀氏は、李宥善氏の先行研究に当たる『韓国洋楽百年史』を取り上げ、「古来から韓国に唱歌という歌は存在しない。勿論、このような音楽形式がなかったことはいうまでもないが、唱歌という語彙も見当たらない (32頁)。このような論述は韓国音楽史の未熟を自ら表わしたものである。このような歴史考察は、韓国洋楽360年史のみならず、朝鮮時代においても『唱歌』という用語が散見しており、唱歌の近代的意味は米国の改新教宣教師が入国する直前にも見られた」¹⁸⁾ と論じている。

韓国における近代音楽教育は賛美歌から始まったと言われる。しかし、李宥善氏の見方は、賛美歌が普及されたとは言え、その影響を受けた学校教育の視点から、洋楽を基本とする唱歌が生み出されたとは見ていない。韓国の場合、賛美歌と唱歌は、そのジャンルを区別せず、黎明期から交錯した経緯が存在する。この特徴は日本唱歌の歴史にはあまり見ることができない史実である。¹⁹⁾ 李秉岐、白鐵氏の定義を再引用すると、「『唱歌とは何か』は文字の意味通り、それは歌を歌うことである。ところが、注目すべきことは、それが歌を歌うこととは言え、大昔の詩調や歌辞ではなく、洋楽による歌を示すものである。すなわち、開化期に現われた唱歌

は、わが国の洋楽の始まりであり、近代的歌詞がこの時代から始まったとも言える²⁰⁾と示している。また、アレン (Allen.D.Clark, History of Korean Church p.47) の報告によると、1928年に「約40年前、初めて朝鮮に上陸した宣教師たちは、目的である布教事業を展開する際、音楽は礼拝儀式に欠かせない重要な要素であった。したがって、やさしい唱歌をハンゲルで翻訳して歌い始めた²¹⁾」という事実をみても、賛美歌と唱歌のジャンルが区別されていなかったことがわかる。賛美歌は教会や宗教儀式のみに限られる音楽ではなく、開化という歴史的な近代文化運動の象徴であり、原動力でもあった。

李宥善氏は、「韓国において賛美歌は教会の礼拝儀式のみならず、唱歌運動と新文学、とりわけ新詩運動の母体となり、その歴史的意義は大きい。韓国における改新教の賛美歌は韓国に洋楽を伝播しただけではなく、愛国運動と唱歌運動の展開として表われた。賛美歌は、わが国の民族主義の旗幟となり、近代文化運動、更に芸術歌曲と大衆音楽に至るまで、実に韓国の近代文化の母体であることは否定できない²²⁾」と論じた。「愛国運動と唱歌運動の展開」は、まさに筆者の主要研究テーマである「愛国唱歌教育運動」とその思想を近似している。

加えて、李宥善氏は「朝鮮の洋楽史における賛美歌の比重と意義が正にここにある。賛美歌から始まった朝鮮唱歌は日本唱歌と根本的に異なり、小学生が歌う童謡とも同じものになれない。朝鮮唱歌は旧韓末の風雲と亡国の悲痛な運命の中から芽生えた宗教的な影響と民族精神の表現であり、賛美歌と共に開化期の民族的歴史の清粋、そのものを示している。唱歌とは、ただ歌を歌うというより、祖国の運命を悲しむ民族の叫びであり、自主独立を訴える民衆の喚声であったことを忘れてはいけない²³⁾」と呼び掛けている。

しかし、「賛美歌から始まった朝鮮唱歌は日本唱歌と根本的に異なる」という論述は、事実と異なる内容である。本来、賛美歌はグレゴリオ聖歌のように典礼聖歌も存在するが、賛美歌は社会で歌われるものに宗教的歌词が付けられ、賛美歌として歌われることが多い。朝鮮唱歌や日本唱歌の旋律が賛美歌の替歌として歌われたものがあれば、賛美歌の旋律が朝鮮唱歌や日本唱歌で歌われたことも少なくない。李宥善氏の指摘は唱歌や賛美歌の生成過程を十分に考察しないで、賛美歌の存在を重視している。しかし、彼の研究は韓国近代音楽教育史の解明に一つの試金石として先駆的な成果である。

愛国唱歌教育運動の軌跡を辿ると、民衆から国家近代化の過程と同様の思想を見せ始め、伝来のわらべ歌や民謡から、自主独立、文明開化、民権思想などの歌词が現われる。このような変化は、雅楽、民謡とは異なる音楽文化として韓国近代音楽史の転機を迎えたと言える。李宥善氏は開化期唱歌の変遷過程を3期に分けている。第一期では、唱歌は賛美歌の領域を免れていない。第二期では、民族的に展開された愛国歌運動を広げる。そして第三期では、民衆社会から文明開化が歌われた時期である。とみている。²⁴⁾彼の分析は賛美歌、愛国歌、文明開化歌を取り上げているが、これらは歴史と文化の相互関連から韓国近代音楽教育史にとって、どのような足跡を残したかは詳しく考察されていない。²⁵⁾

更に、『独立新聞』の発行をきっかけで「愛国歌運動は、六堂崔南善の《鉄道歌》が作られた1908年を中心に、新たな段階に入り、《鉄道歌》を起点として唱歌は次第に専門家の専業にならざるを得なかった²⁶⁾」と述べている。この部分に関する李宥善氏の分析は、当時の音楽教育の実態をより広く視野に入れると、最初のハンゲル新聞『独立新聞』は、韓国近代新聞史において最も啓蒙的記事に満ちているが、唱歌も愛国啓蒙運動に重要な役割を担っている。とりわけ唱歌普及は愛国唱歌教育運動の展開であり、歌词は文明開化、民族精神、忠君愛国などの歌词を中心とする読者寄稿が満載されている。これらの歌词は、近代学校の生徒や開化思想をも

つ民衆から、《愛国歌》《同胞覚醒歌》《自主独立歌》《同心歌》《鉄道歌》などが広く歌われた。

ところが、《鉄道歌》は、日清戦争後、文明開化や愛国精神が高まる中で、日本陸軍による閔妃殺害、²⁷⁾ 国王高宗の露館播遷、²⁸⁾ 義兵蜂起などが象徴するように、日本の朝鮮支配が強まる時期に、小さな隙間にみえる文明開化を喜ぶ民衆が《鉄道歌》などを寄稿したことは事実である。《鉄道歌》歌詞は「1908年を中心に、新たな段階に入り《鉄道歌》を起点として唱歌は次第に専門家の専業」となったという論述は、事実とは言い難い。1908年は、韓国が主権を喪失した第二次日韓協約（1905年）以後であり、《鉄道歌》が近代文明を象徴する蒸気機関車を描いても、万民が喜んで受け入れるものではない。朝鮮における鉄道歴史は港を有する仁川と首都漢城を結ぶ京仁線から始まり、それは日本の朝鮮支配になくてはならない重要な鉄道である。その結果、抗日運動家は、京仁線の鉄道爆破を何度も繰り返したことをみてもよくわかる。²⁹⁾

一方、李宥善氏は、『独立新聞』の創刊と第二次日韓協約の締結という支配および文化の展開は、日本勢力に対する朝鮮民族の民族主義を呼び起こしたと力説している。このような民族主義を背景に「開唱運動」が1908年、民族指導者の崔南善による雑誌『少年』を中心に広めた文学と音楽の分化過程に「開唱運動」が本格的に普及され、それが近代学校の学科課程に唱歌という教科として位置づけられたとみている。³⁰⁾

李宥善氏のいう「開唱運動」の概念は明記されていないが、民衆が鎖国政治から開国を迎え、近代、開化、洋楽、支配などの光と影が共存する変革を新しい音楽文化として表現したものと考えられる。しかし、「開唱運動」は、初めて登場した用語であるが、その概念については言及していない。「開唱運動」はハングルで記され、とりわけ「開唱運動」は漢字表現として推測するしかない。実際に「開唱運動」「皆唱運動」「改唱運動」などさまざまな造語が浮かび上がるが、正確な表現は不明である。いずれにしても、李宥善氏が近代音楽教育史を解明するため、新しい用語を作りながら、考察してきたと思われる。

3. キリスト教主義学校における洋楽普及と愛国唱歌教育運動

韓国における洋楽受容は、音楽学者の魯棟銀氏によれば、鄭斗源（1581～？）が中国北京より、西洋地理とも言える『職方外紀』『西学凡』、そして『西洋風俗記』など27種の漢訳西学書を導入し、ルネサンス以後の西洋音楽教育制度に関する短編的な紹介があったという。³¹⁾ 魯棟銀氏は「韓国教会音楽史において歌詞としてイエスに信仰告白し、既存の賛美歌や民謡、あるいは民族的形式として創作した民族賛美歌運動のきっかけは19世紀の天主教歌詞から始まった。改新教における民族賛美歌は独立協会と万民共同会を通じた唱歌運動から具体化された」³²⁾と述べており、朝鮮の洋楽普及は民族賛美歌運動が影響を与えたと考えられる。

朝鮮において洋楽が最初に奏されたものは、中国語賛美歌を幾つかの小節、あるいは1番、2番であったが、まもなく英語賛美歌も翻訳歌詞として少しずつ歌ったという。³³⁾ 逸早く入国した米国宣教師ジョンス、ワイラーは最初の文字賛美歌を出版したが、開拓期の教会設立以来、礼拝儀式に使われた讚美歌に関する内容は明らかにされていない。ただし、白ホンジュンが賛美歌を中国語で歌ったとか、あるいは中国語賛美歌を翻訳し、西北地方の平安道に普及したのもある。³⁴⁾

朝鮮における西洋音楽受容の通路は定説が存在しないが、魯棟銀氏は二つの通路を取り上げ、「書物としてはポルトガルのイエス会神父ペレイラ（T.Pereira）とイタリアのラザリスト神父ペドリニ（T.Pedrini）の『律呂正義続編』第1巻（1749年）を18世紀に洪大容（1731～1783年）、李圭景（1788～？）、徐有榘（1764～1845年）が洋琴、洋楽理論、自鳴琴などを受容した」³⁵⁾

とあり、「通路は西洋教会音楽を通して替歌の形態が現われた。神父崔良業（1821～1861年）の《聖シメオン頌歌》（Nunc dimittis servum tuum Domine）」³⁶⁾も存在したという。賛美歌をはじめ、《グレゴリア聖歌》《アレルヤ》《離別歌》《天国歌》などが替歌として広く歌われた。朝鮮カトリック教会はグレゴリア聖歌や洋楽風の聖歌を普及しながら、1860年代より天主教歌詞を朝鮮の民謡旋律に載せた替歌として発展させた。³⁷⁾

キリスト教主義学校として逸早く設立された梨花学堂（1886年）は当時、女子教育を認めない厳格な儒教社会にも関わらず、同年11月4名、1887年7名、そして1888年18名を募集している。学科課程は米国人女子宣教師による英語、音楽などが課されており、音楽は《主の祈り》《主われを愛す》などの賛美歌を英語で教えた。³⁸⁾

前述のように、朝鮮を紀行したイザベラ・バードは「場所として最良のところに建っているのは監理派教会所属の建物群で、男子校と女子校をはじめ、印刷所、連合教会、男女別の病院付属の診療所がある。この教会付属の女学校は、その機構と成果において、これまでわたしが見たなかでも最もすばらしいものに数えられる」³⁹⁾と監理派教会の教育事業を高評している。

1890年に来朝したジョーンズ（George H. Jones）女史が仁川に設立した永化学校においても、唱歌を課した記録として「音楽は唱歌と呼ばれたが、主に翻訳された賛美歌を教えた」⁴⁰⁾という。また、イザベラ・バードは「まわりの人々は最初から好意を示し親切だった。早くに三人の友人となった人々はいまや最も忠実な友であり、三人の人柄と目的をよく知っていたから、三人が新しい家に移ってから疎遠になることはまるでなかった。三人に会いにくる者もあれば、家具を見にきたりオルガンを聞きにきたり、また『イエスの教義』について尋ねにくる者も何人かいた」⁴¹⁾と報じているように、彼女は学校教育だけではなく、社会教育にも関心をみせており、そこには音楽活動も窺える。

近代学校における音楽教育の立場から、賛美歌が先駆的音楽教育の教材として取り上げられているが、実際は学校より社会からより広く普及されていた。その事例は、北監理派宣教師部（Methodist Episcopal Mission）の無名朝鮮人女性が作詞した賛美歌は第53番《イエスの高い名前》として残され「イエスの高い名前が私の耳に聞えた後 全ての罪が免除され死後の天国は私のもの」⁴²⁾と歌われる。この賛美歌は、朝鮮讚美歌集に最も多く掲載されており、とりわけ閔妃暗殺後、民衆の間に《追悼歌》として広く歌われたものである。

培材学堂における教養課程部の学科課程を取り上げると、1年では、英語（基礎文法）、算数初歩、読本（第3巻、第4巻、綴字、書取）、唱歌、漢文、諺文（ハングル）、2年では、英文法、算数、一般科学、読本5巻、綴方、翻訳、書取、歌唱、漢文、諺文、3年では、英文法、英作文、算数、漢文、諺文、一般科学、知識と系統、言源学、美術、歌唱などが課された。学科課程の編成は、英語を筆頭科目とする人文科学をはじめ、算数、一般科学などの自然科学、歌唱、美術の芸術を課し、欧米の学校教育にみられる自由七科、すなわち教養科目を全面に出している。

ところが、キリスト教主義学校の象徴である宗教教育は見当たらないが、宗教教育は学校教育より優先され、寄宿舎生活を前提とする生徒らに、宗教活動以外の時間に学校教育が課された。生徒は、漢学を重視する書堂に通う裕福な家庭の子弟とは全く異なる極貧家庭の子弟や孤児が入学したが、彼らは宗教、英語、近代文明を懂れて入学したというより、飢餓、差別、迫害などを免れるために在学したことが多い。

1892年、北監理派宣教師部（Methodist Episcopal Mission）に作詞者未詳の女子生徒が作った賛美歌第53番《イエスの高い名》は「イエスの高い名が 我耳に聞えた以来 全ての罪は免除

され 死後の天国は我のもの 人間の肉体は誕生の根本 哀れな卑しい肉体を全く意識するな
そこが故郷であり 善良な靈魂が集まる」⁴³⁾と歌われるが、《イエスの高い名》は多くの信徒
らに反響を受け、教会を中心に愛唱された。同時に、《イエスの高い名》は讚美歌集に最多に
掲載されたものであり、閔妃暗殺後、替歌として《哀悼歌》と称され、民衆の間に広く歌われ
た。

朝鮮において最初に発行された賛美歌集は、監理派宣教部のジョンズ (G.H.Jones) とロード
ワイラー (Louise C.Rotheiler) が1892年に共編した歌詞付けだけの『賛美歌』である。本書は
30曲位の外国賛美歌を翻訳したものであるが、唐紙に印刷された小型冊子として監理派教会の
専用賛美歌集である。⁴⁴⁾しかし、1892年頃から賛美歌の移入を中心とする洋楽普及および信仰
教育について、そのあり方が問われる。ジョンズは、著作『賛美歌』の序文に「翻訳で納得で
きるような賛美歌が現われるはずがない。賛美歌1行の翻訳のために、数日を尽力しても、完
全な内容は作ることができない。その結果、われわれは一つの結論に達した。それは、朝鮮人
の内面から現われる彼らの歌詞とメロディーで作ることが理想である」⁴⁵⁾と悟っていた。こう
して朝鮮人による作詞が初めて掲載されたものは、アンダーウッドが編纂した『賛揚歌』(1893
年)である。同書は117曲が集録されており、韓国人による作詞の賛美歌も掲載されている。⁴⁶⁾
一方、カトリック教会においても1893年からトロルロープ (M.N.Trollope) 神父が編集した
『朝萬民光』(Life or Blessed Lord) という布教用小冊子を発行し、聖書を翻訳出版すると共に、
賛美歌集と伝道文書も発行した。⁴⁷⁾

このように、賛美歌集が発行され、教会の礼拝にどれほど歌われたか、というと「礼拝の際、
賛美歌はあまり歌われなかった。なぜなら、賛美歌を高らかに歌うと、外部の注目を惹くこと
を恐れるからである」⁴⁸⁾と伝えている。宣教師ゲイイルの証言によると「賛美歌は西洋音楽に
合わせて歌うため、われわれの西洋音楽は朝鮮人にとっては、全く意味がなさそうにみえる。
音楽のメロディーや表現だけをみれば、「万歳盤石」の厳肅な賛美歌より、軽快な音楽が望ま
しい」⁴⁹⁾と提案している。また、賛美歌の調性についても、日清戦争直後に平壤で布教活動
をしたモフェットは、「自由奔放に賛美歌がそれぞれ歌いやすいばらばらキーで歌われ」⁵⁰⁾たとい
う。

日清戦争後、抗日運動が最も激しく展開された地域は平壤であり、平壤地域の生徒らが活動
する内容を取り上げると「普通門付近の学徒と大同門付近の学徒が頭に国旗を飾り、愛国歌を
歌うと、往来する町の人々がその歌詞の意味を尋ねる。宣教師のモヘットと李吉函をはじめ、
多数の教師と生徒が答えた内容は『この歌は国を愛し、民衆のための意味である』と返事した。
群衆は素晴らしい歌であると讃えると共に、生徒らに『諸君の心から、思い出せる文字を一つ
ずつ取り上げろと求めたところ、生徒らは愛の『愛』、信じるの『信』、忠誠の『忠』、孝行の
『孝』を答えると、群衆は満足する表情で今後の活躍を期待したい」⁵¹⁾と言いながら、帰宅した。

日清戦争の勃発と俄館播遷は、民族と国家の危機を民衆に直接に悟るきっかけを与えた。政
治はいうまでもなく、文明開化として移入された西洋音楽においても、賛美歌の風味を含めた
民族精神が入り交じり、愛国唱歌教育運動は朝鮮の現実をそのまま投影した。

培材学堂生徒の崔ヨンクは、《愛国独立歌》歌詞を「大朝鮮国の学徒よ 一心で独立のため
に 独立歌を聴いてみよう 合心二字を忘れるな 急いで独立しよう 同胞兄弟よ目を覚めろ
このチャンスを失わず 自主独立を実現しよう」⁵²⁾と訴えている。平壤の普通門町の李ヨン
オンは「わが大朝鮮の自主独立は間違いない 自主独立を叶い文明開化は嬉しい 十部衙門の
大臣は忠良之心を抱き 各府各郡觀察郡守 善政善治徹頭徹尾面々村々百姓は土農工商 三綱

五倫を遵行し 孝悌忠信守ろう」⁵³⁾と歌われたが、このような愛国唱歌教育運動は西洋文明と自主独立を目覚めたキリスト主義学校を中心に普及された。

朝鮮政治に対する清国の退却は、新たに日本の支配という宿命を抱えながらも、政府と民衆に新しい時代の希望を覗かせるものであった。民族指導者らは、この政局を国権確立の契機へと導くために、首都漢城に独立門の建造に着手した。独立門定礎式の式次をみると、「斉唱《朝鮮歌》(Korea) 生徒合唱団／定礎／祈祷 アペンゼラー牧師／独立協会長演説 安燭寿將軍／祝辞「我が国の未来」 李完用／祝辞「韓国の外国人たち」 徐載弼博士／斉唱《進歩歌》 生徒合唱団／訓練体操 王立英語学校」⁵⁴⁾と行われ、民族指導者、軍人、有志、宣教師、生徒などは国家存立を熱望する趣旨に基づき、その意志を演説、歌唱、祈祷などで表わしている。これは民衆意識と音楽文化を単なる歌唱として受け取らず、民衆側から国家独立の意識が生成されており、民衆啓蒙を促す近代的討論と愛国唱歌を生み出す過程であることを物語っている。言い換えれば、愛国唱歌は儀式音楽だけではなく、国家独立と民族精神が高揚され、愛国精神、民族思想への昇華を促す愛国唱歌教育運動の萌芽期として受け止められる。

この時期に一つ注目すべきことは、欧米宣教師が朝鮮にキリスト教の布教事業として賛美歌を重視し、かなりの成果を挙げていたことである。しかし、それは欧米賛美歌の翻訳歌詞が主流をなし、朝鮮固有の賛美歌は朝鮮人自ら作ったものがあるものの、その賛美歌を音楽芸術の視点から考究すると、発展途上の段階であった。このような事情は、欧米宣教師自身が熟知したことはいうまでもないが、いわゆる「開拓地」としては恒例であり、発達段階に避けられないものであると認識することができる。

ところが、1897年、宣教師ゲールは異文化に強烈な関心をみせ、朝鮮の伝統と文化に相当な見識を有することになり、「朝鮮の賛美歌は、朝鮮人の感性と語彙に適する朝鮮固有の賛美歌を創るべき」⁵⁵⁾と提案した。この呼び掛けは、同年に梨花学堂と培材学堂の生徒から、創作賛美歌を創り出し、讚美歌集の第87番、第89番に掲載され、『朝鮮キリスト人会報』(1897年3月31日付)に「生徒がこのような賛美歌を創り、素晴らしい歌詞だけではなく、その論理的思考が正確に伝えられている」と報じている。梨花学堂の生徒が創った賛美歌歌詞《聖誕日賛美歌》を取り上げると「ベツレヘムで生まれたイエス／救援しに来た／私たちは心に刻み付け／主を賛美する」⁵⁶⁾と歌われたが、賛美歌は宗教儀式音楽に止まらず、「聖書を手にする前に、まず賛美歌を求め、女子は賛美歌を歌うためにハングルを覚えた」⁵⁷⁾とあり、これは北長老派宣教師部が「賛美歌は信徒らのハングル教本の役割をした」⁵⁸⁾と報告したことをみても、賛美歌は宗教や芸術だけではなく、近代教育の重要機能である文盲退治にも貢献したと言える。一方、培材学堂、梨花学堂のみならず、蓮洞女学堂(貞信女学校)も「現在、生徒が20人おり、学校規則は学問だけに拘らないで、心の教育と力の教育を平行させる。そして学科課程は聖書、料理、裁縫、国文、習字を毎日に与えることと賛美歌と音楽活動を課している」⁵⁹⁾と伝えている。

1904年、日露戦争が勃発すると、この戦争の性格が語るように、ヨーロッパ巨人のロシアと北東アジアの小さな島国日本との戦いに日本の勝利は世界に衝撃を与え、日本国内も国民的に熱狂していた。当時の証言によれば、山口県の子どもたちも「勝った 勝った 日本が勝った」⁶⁰⁾と勝利の喜びを歌で表わした。しかし、日露戦争の日本勝利は日本に希望と歓喜をもたらしたが、その戦争の目標である朝鮮支配は、朝鮮民族に亡国の悲しみと苦しみを与え、両国の歳時風景は光と影の対比を鮮明に顕示した。

朝鮮民族は日露戦争による国権喪失がもたらす挫折と絶望に耐え切れず、多くの民衆が心の安穩を求め、キリスト教に帰依した。信徒は夥しく増え、世界宣教史に奇蹟をもたらしたと言

われる。

日露戦争直後、1905年の教会動向を取り上げると、監理派教会から「監理教書会は資金を備えて、新版賛美歌集をもうすぐ出版する。1万部を印刷したが、製版が早速に完成される以前に在庫不足になることは間違いない」⁶¹⁾とキリスト教の隆盛を報じている。同年、「長老教公議会は、賛美歌委員会を通して監理教賛美歌委員会と協議し、合同賛美歌委員会を構成した上、合同賛美歌委員に共同賛美歌の編集と発行を実施する」⁶²⁾と決定した。

その後、牧師養成機関である「査経会」は「聖書の知識程度により、聖書指導者らを各組に分けて編成した。午後は1時間くらい賛美歌教育を行う」⁶³⁾と答申している。査経会の上級機関である「大査経会」は「学科目においては衛生、一般教養が少し課されたが、聖書が最も重要な科目である。早朝の祈祷会では賛美歌教育が行われ、朝食後、それぞれ所属班に戻り、聖書と賛美歌を復習した」⁶⁴⁾という。

キリスト教指導者養成は、それぞれの地域に音楽普及機能を果たしたが、単なる教会儀式に止まることなく、社会にも音楽文化を新しい方向へ導いていた。1906年10月23日、「基督教青年会館で米国在住哲学博士の趙元時氏のために親睦会が開かれた。大韓国旗と本会の会旗を掲げ、臨時会長金明濬氏の案内で会場の席次を定めた。会長は親睦会の趣旨を詳しく述べた後、(中略)本会の総務である吉礼泰氏は西洋の有名な歌曲を歌った。本会の英語教師の金奎植氏は、該氏演説に感謝の謝辞を終えると、会員全員が《愛国歌》を斉唱後に解散した」⁶⁵⁾と報じている。

このように、愛国唱歌教育運動は、主にキリスト教主義学校の音楽教育を通して、洋楽受容を試みており、とりわけ賛美歌の普及は洋楽受容の原動力となった。もし朝鮮にキリスト教が布教されなかったら、愛国唱歌教育運動はわらべ歌や伝統音楽で行われ、近代音楽教育はかなり遅れたと思われる。愛国唱歌は文明開化、民族精神、抗日思想など民衆と国家が抱えている課題を唱歌教育やキリスト教から模索していた。当時、欧米を中心に現われた帝国主義が新興日本の政治外交にも大きな影響を及ぼしたが、その反動が北東アジアに民族主義の発芽をもたらしたことはいうまでもない。その結果、長い鎖国政治からようやく目が覚めた朝鮮においても、キリスト教主義学校という別格の空間を通して、新しい音楽教育として愛国唱歌教育運動が生成され、朝鮮固有の音楽教育を生み出していたと言える。

おわりに

韓国に関する植民地教育研究は、主に日露戦争を中心に国権喪失と抗日運動が対象になり、支配と抵抗のダイナミクスを描く研究が多い反面、日清戦争を中心に考察した研究は少ないし、ましてや政治や社会に余り関わりを持たないと認識されている音楽教育分野の研究が日清戦争を中核に分析することは、ほとんど存在しないと思われる。その理由は、島国の日本が大陸の清国に勝利を収めたとはいえ、それは北東アジア同士の戦いだからである。その反面、日露戦争は、ヨーロッパの巨人ロシアとようやく国際社会に存在を認められた新星日本が戦争を通して、ロシアに勝つという史実は大きな歴史転換をもたらしたものであり、日露戦争が注目されるほど、日清戦争は日露戦争の道程として認識され、その歴史が忘れられた部分がある。

こうした意味から、日露戦争の結果は、朝鮮の日本植民地化という政治、外交など支配と抵抗の歴史を作り出した。しかし、日清戦争の結果は、日露両国の緊張関係から照らされた新しい時代の通風に触れられ、別の視点から文明開化が朝鮮政府の意思で一定部分を可能にできたと言える。本稿は、この時期の朝鮮が洋楽受容を基に愛国唱歌教育運動をどのように展開した

かを実証的研究の立場から分析したものである。

当時の米国キリスト教団体は、開国直後に逸早く入国したが、その歴史を振り返ってみると、朝鮮中期から儒教社会に布教事業中に多くの殉教者を出し、密教としての命を繋いできたキリスト教がようやく公認される立場を迎えた時代である。キリスト教が朝鮮民衆に一定の成果を上げた根拠は、純粋な信仰思想も存在したが、宣教師らの布教事業で普及した欧米文化から生み出された近代文明に新しい世界を認識させた所が大きい。こうした視角から、朝鮮の洋楽受容を民衆から呼び掛けた行為は、この時期から一定の部分を受容したと解釈すべきである。したがって、日露戦争以後、本格的に展開された愛国唱歌教育運動の原点を探るなら、日清戦争から分析することはいうまでもない。

本稿は、韓国の代表的な音楽学研究者である李宥善氏と魯東銀氏の優れた先行研究に恵まれた部分が多い。研究性格から前者は、明確なスタイルは確立されていないが、思想的研究の一角が見られる先駆的研究として、多くの引用と示唆を得ることができた。後者は、現在も精力的な研究を行っており、著書『韓国近代音楽史1』(824頁)は豪著として、徹底した実証的研究であり、韓国音楽史の新しい地平を開いている。なお、前者は、著書『基督教音楽史』において「愛国運動と唱歌運動の展開」という萌芽的表現が見られたが、これと関連する後続記述は全く見当たらない。この表現は筆者の重要研究分野の一つである「愛国唱歌教育運動」に近似する表記とみられ、一応の系譜が存在していたという事実を確認することができた。

注

- 1) イザベラ・バード、時岡敬子訳『朝鮮紀行』講談社、1998年。著者のバードは、1894年1月から1897年3月まで朝鮮を4回縦断旅行した。
- 2) 松井孝也『一億人の昭和史 日本植民地史1 朝鮮』毎日新聞社、1978年8頁(要約)。
- 3) 同上書3頁。
- 4) 川崎三郎「朝鮮問題」(『太陽』第1巻第7号、1895年7月5日)7～16頁。
- 5) 「東邦協会と朝鮮教育」(『教育報知』第436号、1894年8月25日)
- 6) 金泰勲『近代日韓教育関係史研究序説』雄山閣、1996年、64～65頁を参照されたい。
- 7) 岡倉由三郎「朝鮮の教育制度を如何すべき」(『教育時論』第338号、1894年9月5日)43頁。
- 8) 同上書。
- 9) 同上書。
- 10) 同上書。
- 11) 「朝鮮国教育研究団体」(『教育時論』第338号、1894年9月5日)47頁。
- 12) 「朝鮮教育の現況(承前)」(『教育報知』第438号、1894年9月8日)。
- 13) 「朝鮮教育改良案」(『教育時論』第343号、1894年10月25日)。
- 14) ネイビス方法(Nevius Methods)とは、朝鮮布教において初期に考案された布教方法であり、1893年第1回宣教師公儀会で採択されたものである。ネイビス(John L.Nevius)は、中国の山東地域で活動した米国北長老派の宣教師である。彼は中国でネイビス方法を適用したが、期待した成果は上げられなかった。その後、同僚のメイティーアー(Mateer)がネイビス方法を書籍で出版したが、意外に朝鮮でネイビス方法に強い関心をみせ、大きな反響を得られた。朝鮮の布教事業が「世界キリスト教の奇蹟」と呼ばれたことは、ネイビス方法が重要な役割をしたと言われる。その後、ネイビス方法は、主に未開地の布教事業

に着手する方法の一つとして使われている。その布教活動の要目を取り上げると、①布教事業をどのように始めるか ②改宗者をどのように取り扱うか ③信徒団体をどのように管理するか ④自給、自立のために何をすべきか ⑤信徒の宗教教育 ⑥聖書研究 ⑦規則確立 ⑧規律 ⑨教会組織 ⑩他教派との関係 ⑪学校運営 ⑫医療事業 ⑬宣教師の仕事 ⑭布教方法の伝授 ⑮布教方法の動力 ⑯異教徒信仰に対する姿勢 ⑰民衆の経済生活に関する宣教師の策略などが取り上げられている。

- 15) 李宥善『基督教音楽史』基督教文社、1990年、170頁。
- 16) 同上書171頁。
- 17) 魯東銀『韓国近代音楽史1』ハンギル社、1995年、402頁。
- 18) 同上書。
- 19) 安田寛『唱歌と十字架—明治音楽事始め』音楽之友社、1993年。手代木俊一『賛美歌・聖歌と日本の近代』音楽友社、1999年。
- 20) 李秉岐、白鐵『国文学全史』232～233頁。
- 21) 李宥善『基督教音楽史』175頁。
- 22) 同上書178頁。
- 23) 同上書。
- 24) 李宥善179頁。
- 25) 「開唱運動」について李宥善氏は、愛国運動は国運と共に、民衆から「開唱運動」として広がり、本格的な唱歌運動を展開した。一方、近代教育の学科課程、あるいは文明開化を称える段階へと発展した。こうした展開から、唱歌は発展過程において賛美歌の領域を免れられない時期が第一段階であり、それを連带的に展開させた愛国歌運動を第二段階であると見られる。そして世俗的な開化風潮が歌われた時期を第三段階と言える」と定義している。(同上書)
- 26) 李宥善179頁。
- 27) 閔妃（ミンビ、1851～1895年）は、朝鮮26代国王の高宗の妃である。高宗の父親である大院君を斥け、清の勢力を背景に政治を掌握したが、日清戦争の後、ロシアと結び日本排斥を企てたため、日本公使である三浦梧楼の陰謀により1895年10月8日、日本人壮士に惨殺された。
- 28) 露館播遷とは、1895年2月11日、親露派が国王高宗と皇太子をロシア公使館へ連れ去った事件である。閔妃殺害後、民衆の対日感情が最悪となり、各地で義兵が立ち上がり、国が不安定になる。ロシア公使ウエベルは公使館保護という名目で海軍100名を首都漢陽に出動させた。親露派の李範晋などはウエベルと共謀し、1896年に国王を宮殿から、ソウル貞洞のロシア公使館に連れて来た。同時に親日内閣の金弘集、魚允中などは殺害され、兪吉濬、趙義淵などは日本へ亡命した。李範晋、李完用などの親露内閣が組織された。国王がロシア公使館に滞在していた1年間、すべての政治は露国の下に置かれた。当時、度支部（財務省）顧問アレクセイエフ（Alexeiev）は、事実上財務大臣と同様であった。さらに、露館播遷以後、多くの利権がロシアをはじめ、列強に渡された。
- 29) 松井孝也『一億人の昭和史 日本植民地史1 朝鮮』。
- 30) 李宥善181頁。
- 31) 魯棟銀347頁。
- 32) 同上書678頁。

- 33) 邊宗浩『韓国基督教史(概要)』心友園、1959年、164~165頁。
- 34) 李萬烈『韓国基督教文化運動史』大韓基督教出版社、1992年、346頁。
- 35) 魯棟銀363頁。
- 36) 同上書363~368頁。
- 37) 同上書404頁。
- 38) 同上書400頁。
- 39) イザベラ・バード『朝鮮紀行』89~91頁。
- 40) 永化女子中学校『永化70年史』1963年、57頁。
- 41) イザベラ・バード『朝鮮紀行』44頁。
- 42) 閔庚培『韓国教会賛美歌史』延世大学校出版部、1997年、28頁。
- 43) 同上書28頁。
- 44) 李萬烈『韓国基督教文化運動史』345~346頁。
- 45) 閔庚培『韓国教会賛美歌史』27頁。
- 46) 李萬烈、前掲書、345~346頁。
- 47) 同上書345頁。
- 48) L.H.Underwood, Underwood of korea, p.122
- 49) J.S.Gale, A Few Words on Literature the korea Repository for November, 1895. p.424
- 50) バード445
- 51) 『独立新聞』1896年9月5日。
- 52) 『独立新聞』1896年9月8日。
- 53) 『独立新聞』1896年9月10日。
- 54) His Majesty, the king of korea, the96. p.423~430
- 55) J.S.Gale, korean Hymns-Some Observations, The Korea Repository, May, 1897, pp.184~186.
- 56) 『大韓クリスト人会報』第2巻第51号、1898年12月21日。
- 57) F.S.Miller, Early korean Hymnology, op.cit., p.190.
- 58) The Report of the Pyeng Yang Station, 1902-1903, korea Mission, the Annual Report of the Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the U.S.A., September, 1903, pp.55~56.
- 59) 李萬烈、前掲書。
- 60) 山口県在住の佐々木恵氏の祖母は、時々こういう歌を歌ったという。
- 61) Minutes of Anl mceting of M.E.C.in Korea (1905) pp.81~82
- 62) S.F.Moore, Steps toward Missionary Union in Korea, the Missionary Review of the World, N.S., Vol.18, No.12 (December, 1905) 903~905.
- 63) M.E.North Report for 1905, p309
- 64) 白樂濬『韓国改新教史』延世大学校出版部、1985年、315頁。
- 65) 同上書。